通信第八十一号　本願反応

　ひと頃よく違う分野の人と人が対談したり、共演したりすると「化学反応が起こる」という表現がありました。最近私にいろいろな人と遇うご縁が生じてきました。そこで教えられること、気づかされることが多々あり、お育てを頂く日々であります。はじめてお遇いする人、あまり気の進まないご縁の事など様々ですが「本願反応」という姿勢で往きますと、はずれが無いといいますか、むなしさがありません。「本願力に遇いぬれば　空しくすぐる人ぞ無き」と親鸞さまの仰せの通りです。

さて、今年も残すところわずかと成ってきました。法喜さんが食事中ふとつぶやきました。「アメリカ、アメリカと言っていたのにもう暮れになった」と、時は忘れている間に駆け足でやってきています。大石先生が「本願が信じられたら、十年で大仕事をするよ」とおおせられました。私は一念帰命から六年たちました。確かに煩悩具足の愚か者は何一つ変わらずむしろ増してきています。しかし、別世界は大きく育てられている実感があります。根が地中に広がるほど地上の樹が育つように。

　十一月十一日にご縁があった福井の同行さんから私の『荒城の月』の替え歌を知りたいというご要望がありました。本箱から歌詞を二十年ぶりに取り出しました。ブラジルへ行ったときに出来た歌詞です。この度新たに一つ沸いてきました。新しい歌詞を一番にして、次のような歌詞を三番まで書いて送らせていただきました。

1. ご恩の中にゆるされて

べばに　きけり

光の中に生かされて

仏の光　今ここに

1. 不思議な縁の　出遇いかな

声聞くだけで　力く

遠い遠い宿縁か

あなたと出遇い　華がさく

1. ふたたび遇いて　なつかしい

遇うたびさらに　なつかしい

共に在りて　温かし

言葉の絶えて　お念仏

仏の光り　今ここに

　湯布院の正観寺（佐藤正範住職）さんの報恩講で皆さんと共に歌い感動しました。正観寺さんは法要の一時間前に役員会をされることもあってか、本堂の半分以上が男性の方々です。熱気が充満しています。平素の住職、坊守さんの願いが現れているのでしょう。ご法座のあと坊守さんの兄上の本願寺派の元ご住職さんが講師部屋へわざわざお礼に来て下さいました。住職さんも「私の生きている限り来てください」とのことで、こちらの方が深いお励ましを頂いたことでした。富山の浄円寺（重共聡住職）さんからも「報恩講が近づくとピリピリするが本願道場が近づくとわくわくする」というたよりをいただきました。

　私の法話は一般向きではないようです。若い頃から一般的な法話を聞いても物足りず、何か足りない「そこから先が聞きたい」ということを強く感じていました。そういう中で藤谷秀道先生とのご縁をいただいたのです。「そこそこ、そこが聞きたかった」という感動で聴聞させていただきました。「我執」・第一の関所、さらに「法執」第二の関所の問題でした。我執の問題は分かりやすく身に覚えがあり聞きやすいのですが、そのはるか奥にある法執はなかなか問題になりません。大きな事件などをご縁として深く法執の問題が問われて来ます。「観無量寿経」のやビンバシャラ王ご夫妻もよく聞法され、お釈迦様を庇護されていました。そこに起きた悲劇がご縁となったのです。よく聞法されていた関東の同行さん達が十余カ国の境を超えて京都の親鸞さまのもとへいのちをかけて問いにゆかれた問題も共通されると私には思わされます。

第二の関所のところで本願反応が強く起こります。多くは第一の関所のところで自分自身が深く問われずに止まる人が多いようです。「の一大事」「薄紙一枚」という言葉は死語のようになっています。

のお譬え、「捨身の半偈」も最近ではあまり聞かれなくなりました。雪山で道を求めて修行していた修行者（釈尊）を帝釈天が鬼の姿と成ってためします。

　　諸行無常（諸行は無常なり）

　　是生滅法（れ消滅の法なり）

　驚いて後ろをふり向くと鬼が立っています。「今言われたのはあなたですか」「そうだ」「ならば、奥に後半の半偈があるでしょう。そこを聞かせて下さい」「教えてもいいが、わしはご覧の通り鬼だ、生きた血や肉を食べないと生きてゆけない。おまえの血と肉を食べさせてくれるか。そうしたら教えよう」・・・「よろしいです。そのためにいのちがけで修行しているのですから。

生滅滅已（生滅を滅しおわって）

　　寂滅為楽（寂滅となった時が楽である）

　「寂滅の世界をお教えいただきました。後の修行者のために石や壁や樹に書きつけておきます」それから高い樹に登り身を投げ出すのです。鬼は帝釈天にもどり修行者を両手で受けて「あなたこそ本物の菩薩である。大いに無量の衆生を利益して、無明の黒闇の中において、をしてください。私は如来の大法を愛惜するあまり、お苦しめすることになりました。あなたは将来仏道を達成せられるに間違いありません。その時は、私をも済度していただきますようお願いたします」と菩薩の足をして去っていった。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　大般涅槃教聖行品の四　仏教聖典一〇六二頁

　ここを書き写させて頂くと一時の感情ではありますが、今まで私を苦しめた人や事件に御礼が言いたくなります。不思議です。私からは出ない感情です。死んでも頭を下げない、下がらない私。帰命しない私の性根を切るために、如来が身を捨てて下さった。南無して下さった。身近な人に現れて如来さまが、ご師匠さまが先に落ちて下さり、私を落して下さった。阿弥陀仏が南無して下さってこそ南無阿弥陀仏が成立される。そこのところを「発願廻向」と蓮如上人がお教え下さっています。

　　南無と帰命する一念のところに、のこころあるべし。これすなわち弥陀如来の、凡夫に廻向しましますこころなり。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　御文さま五帖目　五通「信心獲得章」

二十二日のリモート法座の時でしたか。「捨身の半偈」のところで、新潟の渡辺義彦さんが「ああ、如来さまが先に身を投げ出されていたのですか」と頭を垂れたお姿が印象に残りました。今まで苦労してきたと思っていたことは皆如来さまのご苦労であった。さらによき師、親鸞様、高僧様、釈尊のご苦労であった。とひっくり返って、暗黒が光明界に転じられます。自分の小さい満足が如来さまと共に大満足の世界へと転じて下さるのです。被害者意識は跡形もなく消されます。

三十日の東欧リモート法座でもそのことが伝わりました。皆さん戦争などで苦労されておられるのでなおさらのことでした。

ここで嬉しいお励ましのお手紙を紹介させて頂きます。

前略、今月の通信八十号は本当に身ぶるいするような深い感動をいただきました。

　　先生から大石先生そして常照先生へと本願が伝えられている事に、仏教の伝統、歴史とはこういう事だと身近にいただく事ができました。

　　はっきりと「本願に生き、本願を伝える」という力強い言葉が、私の思いを出ない聞法の姿勢に一筋の光を見させていただき、法喜様を縁として先生に出遇わせていただいた事に、ただ念仏申すしかありません。

　　　「自分が話させて頂き、自分に聞こえて有難かったです」の一文は蓮如上人御一代記聞書の１２５（聖典８７８頁）

　　　「わがつくりたる物なれども、殊勝なるよ」と仰せられ、嘆ぜられ候う。のお言葉と同じだといただきました。説法される事で、先生自身が法に出遇われているからこそ聞く者に感動を与え、力となっているのではないかと―。（生意気なことを申し、すみません）

　　　腹に落ちる仏法の受け止め方しかできない私ですが、増々「南無阿弥陀仏」とは何かを求めたくなりました。今後とも御教導のほど宜しくお願い申し上げます。

　　では、時節の変わり目御自愛くださいますよう念じております。

合掌

　　　　差出人大山京子さんは輪読会のメンバーです。よほどのことがない限り出席され、真剣で素直な質問を連発されます。さすがにお若い頃、幼稚園の先生をされていたはずです。こうして共々に育てあう同行さんに支えられています。お互いにいよいよ本願反応で深い信心の歩みが始まっています。

ここで終わる予定でしたが、今朝おぞましい夢を見せられました。とっさにげんこつが出てしまったのです。昨夜は有難い文章のご縁として床に就いたのですが、よくあることなのです。有難い法話のあった夜などに「お前の本当の姿はこれだぞ」と言わんばかりです。昔は夢分析をして落ち込んでいました。聞光道のとき新開智英さんが「バランス」ということで自分の体験などを話されました。後になって法喜さんと共に共感したことです。

　藤谷秀道先生は「一念、一瞬の後、如来は如来に帰り、凡夫は凡夫に帰る」と仰せられたことがあります。煩悩をご縁として帰る世界を賜るわけです。実体的にずっと光明の世界に在るわけではないのです。

　親鸞さまは「一念多念文意」の中で

　　　凡夫と言うは、無明煩悩われらが身に満ち満ちて、欲も多く、いかり、腹立ち、そねみ、ねたむ心多く、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、消えず、たえずと、～～～かかる浅ましき我等、願力の白道を、ようようずつ歩みゆけば、無碍光仏の光りのおん心におさめとりたもうがゆえに、かならず安楽浄土へいたれば、弥陀如来とおなじく、かの正覚の華に化生して、大般涅槃のさとりをひらかしむるをむねとせしむべしとなり

　自分の分限は煩悩具足の凡夫であります。親鸞さまは、私たちの迷いの姿を「」に詳しく説い

て下さっています。信心の進む道筋を三願転入（十九願から二十願そして十八願への飛躍）として書き残し

て下さっています。実地に歩いて救われてかれた事実でありますから響いて来ます。

毎朝、大石先生の碑の前で勤行をさせて頂いて居ます。今朝、思いがけなく次の御和讃が出てきました。

　　浄土真宗に帰すれども

　　　真実のはありがたし

　　　虚仮不実のわが身にて

　　　清浄の心もさらになし

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　愚禿悲歎述懐和讃

　そして、不思議に力が湧いてきました。昔はこの和讃を泣く泣く読ませていただいたことがありました。

どうしてでしょうか。かえる世界が与えられたからです。偶然先ほど開いた聖典に次のようなご文章があり

ました。

　　　「来」は、かえるという。かえるというは、願海に入りぬるによりて、かならず大涅槃にいたるを、法性のみやこにかえるともうすなり。～真如実相を証すとももうす。無為法身ともいう。滅度に到るともいう。法性の常楽を証すとももうすなり。このさとりをうれば、すなわち大慈大悲きわまりて、生死海にかえりて、普賢の徳に帰せしむともうす。この利益におもむくを「来」という。これを法性のみやこにかえるともうすなり。

唯信鈔文意　聖典５４９頁

欧州リモート法座のはじまる数日前の夕食中に「今回のテーマはなんですか」というメールを頂きました。

とっさに「滅度の利益」という言葉が口をついて出ました。戦争にいかれた方が参加されるということを聞

いていたためでしょうか。予期せぬテーマが出ました。その方は参加されなかったのですが。「捨身の半偈」

や私の帰命のことなどが話題となりました。だんだん熱が入り、山口さんがるようなオレグさんの通訳で

した。最後に「如来や浄土を向こうにおいてあがめるのではなく、動きがある」オレグさんが「動きがある」

と問い直します。「る、かえる。如来さまが私と成って下さる。私は凡夫のままに如来さまが私を使い、私

が邪魔をしなければ、私をしてはたらいて下さる。如来の願いに生きるようになるのです。こう言う内容は

日本でもなかなか話題になりません」。山口さんが「そうですね。深い内容でしたね。いずれ文章化されまし

ょう」ということでした。

　　往相廻向の大慈より

　　　還相回向の大悲をう

　　　如来の廻向なかりせば

　　　浄土の菩提はいかがせん

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　正像末和讃　聖典５０５頁

如来の廻向というおはたらきがなければ、浄土も念仏も人間には手掛かりがない。菩提心は起こらないということです。一日一日、一瞬の本願反応が楽しみです。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合掌

　令和六年（二〇二四）年十二月初旬

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照　拝